



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	描画過程における子ども間の模倣の研究—模倣を創造へ導くために Research on the Imitation among Children in the Process of the Drawing—How to Lead Imitation to the Creation
Author(s)	奥 美佐子 (OKU Misako)
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇 Journal of the Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University , No.1 : 61-73
Issue Date	2012
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

描画過程における子ども間の模倣の研究 ——模倣を創造へ導くために

奥 美佐子

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: m-oku@shoin.an.jp

Research on the Imitation among Children in the Process of the Drawing ——How to Lead Imitation to the Creation

OKU Misako

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

子どもは摂取した情報をデータとして表現へ反映する過程で、様々な情報処理を行っている。情報摂取前の表現からは変化した表現を創ったのであり、その過程で子どもは美的な経験をしたと言えるのである。そこには自分が持たないデータを使って新しい表現へ繋ぐ創造的な営みがある。子ども間の模倣を奨励することが目的ではなく、否定的に扱われがちな描画過程における子ども間の模倣を肯定的に捉え、子ども間の模倣を創造へ導くことこそ重要だと考える。本稿は、「描画過程における子ども間の模倣の研究」の最終段階として、本研究から導いた子ども間の模倣の実態をまとめ、模倣の効果を生かした指導事例を提案し、これからの保育・教育における描画指導への指標となることを期したものである。

キーワード：子どもの絵、造形表現、描画の指導法

Key Words: children's paintings, formative expression, the teaching method of the drawing

I 目的

本研究は2003年から「子どもの描画過程における模倣の研究」として実践的且つ実証的な手法により継続的に研究を進めてきたものである。一連の研究で解明しようとしたことは、特に乳幼児期から児童期における子どもに出現する描画表現における子ども間の模倣のメカニズムであり、子どもの実態を通じて造形表現における模倣の意味を問い直そうとしたものである。

本研究では描画過程で子ども間に出現する模倣の実態を詳細に調査したデータを基に、独自の基準である模倣度を設定して情報を反映した精度を図り、子どもが摂取した情報と反映した表現の関係から模倣がもつ効力を明らかにしてきた。「まね」としてネガティブに扱われることがしばしばある描画過程における子ども間の模倣は、あるケースでは消極的な問題解決策であり、またあるケースでは積極的な表現展開を目的としたものであったことを、描画過程における子ども間の模倣の研究¹を通じて確認した。子ども間の模倣は、そのほとんどが子どもの創造活動の一端として表現の道筋に組み込まれていくものとして、肯定的なスタンスにあるものだと考えられる。

W. ヴェンヤミンは「人間の備える高度な機能のうち、模倣の能力によって決定的に規定されていないものはおそらくないであろう」²と言う。遊びは多くの点で模倣の能力を育てるもので、幼児期・児童期の造形活動はこの点においても、模倣の能力と密接に関係している。

人間の育ちにおいて模倣は重要な役割を果たすものである。特に幼児期は発達的に見ても模倣が盛んな時期である。子どもの表現という領域で、模倣が否定的なニュアンスで扱われることが多い理由を拙稿を通じて明らかにしてきたが、子どもの描画をさらに創造的な表現に導くために、子どもの描画表現に関わる保育者及び教育者が模倣と創造を対極的に位置づけて、模倣を否定的に捉えるスタンスから脱却し、子ども間の模倣の理解を確実にすることが望まれる。

本稿は、実証的な研究を通じて明らかになった描画過程における子ども間の模倣の実態と特徴についてまとめ、表現と鑑賞の関係を視野に入れた描画指導の指標になることを期したものである。

II 本研究の経緯

本稿は描画過程における子ども間の模倣の研究のまとめにあたるため、これを進めるにあたって本研究の経緯を記す。

本研究におけるテーマ設定は、保育現場における保育者の悩みがその背景にあった。それは、「絵を描く時、よく隣の子どもの真似をする子どもがいるが、真似をしないで独自の絵を描けるようにするには、どのように指導したらよいか」というものであった。この問題は19世紀末～20世紀初頭に始まった児童画の指導、子どもを対象とした美術教育の初期から存在していた。A. ヴィオラは『チゼックの美術教育』に305項目にわたる具体的な子どもの描画指導に関して、F. チゼックの一问一答を記載している。その第30項目の質疑応答で、ひとりの子どものほかの子どもの真似をしてもよいか、という問いにF. チゼックは「否、しかし、ある子どもたちは創造的であるより模倣的である。教師及び両親の仕事は、子どもの創造力が弱い強いかかわらず、ここにおいて創造的な側面を激励することである。もしも子どもが学校でいつも、隣の子どもの真似ばかりしているときは、先生はたくみにその（ふたりの）子どもたちを離れさせるか、あるいは模倣的な子に別の題目と別の絵の材料を与えるべきである。」³と答えている。現在、保育者が抱える課題は、100年前とほとんど変わらない課題である。或いは、課題が変化していないのではなく、F. チゼックが課題としたことが現在まで

継続しているとも言えよう。V. ローウェンフェルドも描画における子ども間の模倣に否定的な見解を示した。4歳～7歳時期においても創造的な子どもは自立性を発揮し、模倣を喜ばず、自分の概念を素直に出して描くが、他児の模倣を始める子どもは自信がなく自立的でない、創造性のない子どもであるという⁴。

模倣と創造の相関と、子どもの資質に関する問題が模倣のスタンスを決定する要因となっていたと考えられる。

我が国においては山本鼎の自由画教育運動（1919～）と、発達心理学における児童画の研究が盛んになったことからの影響があろう。山本鼎はヨーロッパにおいてチゼックの美術教育の影響を受けそれを日本に導入したこと、また児童画の発達心理学的研究では幼児期の子どもの描画は知的リアリズムの時期にあることから、子どもは内的モデルによって絵を描く（G.H. リュケ『子どもの絵』⁵）という考えが基本となり、現在に至っている。美術教育の歴史の流れでその後模倣が忌避されていた訳ではない。1960年代～1980年代にかけて、模倣を肯定的に扱う方向が見えた。E.W. アイスナー⁶、ウィルソン/ウィルソン等⁷による美術教育法の構築である。彼等が扱う模倣とは、模範或いは外的モデルの導入を指すが、模倣への見解は子ども間の模倣への見解と直結したものであった。

子ども間の模倣を否定的に捉えた見解では、真似ること或いはコピーは創造性の欠如に繋がりが、模倣と言う行為をする子どもに問題があると捉えている。本研究は描画過程における子ども間の模倣を肯定的な見解から捉え、模倣はどのようなケースでも子どもにとって意味があり、そのほとんどが創造へ繋がる機能を有するものであることを実証的に証明しようとしたものである。

そこで模倣とは「情報を摂取し、表現に反映すること」と定義し、本研究を進めた。描画過程における子ども間の模倣の実態を把握するために、保育所・幼稚園・小学校の保育者・教育者を対象に、子ども間の模倣の出現状況、模倣に対する肯定的または否定的見解、模倣への対処法について調査した。描画過程における子ども間の模倣の意味、或いは模倣の効果の実証的検討では、模倣の類型・模倣の効果・摂取した情報の特徴・摂取した情報と反映した表現の関係（模倣度による計測）・0～6歳児を対象とした子ども間の模倣の特質・自由画における子ども間の模倣（課題画、自由課題、自由画の相違）について事例研究と実験の実践を通じて、子どもの描画過程で出現する模倣の意味と創造的な表現を生成するためのデータやスキルとしての「模倣」のスタンスを確認するに至った⁸。

Ⅲ 描画指導の指標として——子ども間の模倣の実態——

描画過程における子ども間の模倣を肯定的に捉え子どもの描画を豊かで創造的な表現に導くためには、子ども間の模倣の特質を理解し、且つ模倣の効果を生かした指導・援助、或いは造形活動のプランニングが必要であろう。描画指導の指標として参照できるよう、描画過程における子ども間の模倣の実態を、発達との関連が深い事項、子どもの描画表現と美的経験に関連する事項、情報摂取と表現への反映に関する事項、保育・教育の内容の構造や指導法に関する事項に関する事項、の4事項に分類して以下に記述し、それぞれの項目に簡単な

解説を加えた。

A. 発達との関連が深い事項

A-1 描画過程における子ども間の模倣は乳児のごく早い時期を除いて、幼児期、学童期に一般的に見られる。子ども間の模倣の出現は3歳～小学校低学年が多く、それ以上は減少傾向になる。

0歳児のごく早い時期はまだなぐりがきを開始していない。2007年に筆者が行った質問紙による調査からは保育者・教育者の90%以上から模倣がみられるという回答があり、保育現場での観察からも1歳児から描画過程における子ども間の模倣が確認された。0～2歳児における描画の模倣は心身の発達における模倣の様相と重なり、3歳の時期を境に子ども間の模倣の様相の多くは変化する。

保育所・幼稚園・小学校の保育者・教育者を対象とした調査においても模倣は3歳児～小学校低学年に多く、それ以降は減少傾向にある。M.A. サミール (1965)⁹と Ph. ワロン (1987)¹⁰や M.D. フレザール (1985)¹¹の実験結果から明らかにされたように、自分の実力に見合った模範を同年代の子どもへの描画に求める必要がなくなるのである。

A-2 描画過程における子ども間の模倣における情報の反映は、模倣の発達並びに描画の発達、模写能力の発達等の影響を受ける。

J. ピアジェによる模倣の発達段階では7歳～8歳で模倣がより再現的になるとともに、再構成を伴う詳細な模倣となる。5～6歳児の描画における模倣の精度を事例研究より確認したが、模写能力は十分発揮できる時期だと言える。幼児の模倣の10事例¹²からは4歳児の描画の発達、模写能力の発達を表す事例(事例3)があり、参照されたい。

A-3 子ども間の模倣における情報摂取の方法は、3歳を境に変化する。0～2歳児期は音・手の動き・言葉・視覚などから、3歳以上では視覚情報が中心となる。

描画過程における子ども間の模倣は発達の影響を受けるが、情報の摂取の仕方にも発達の傾向が現れる。3歳以降は視覚情報が中心となるが、時には言語から模倣が伝播することもある。言語からの摂取した情報の表現への反映はイメージの結び方と関連しているため概ね模倣度が低く、視覚情報とは異なる表現への反映となる。

A-4 描画過程における子ども間の模倣から生まれた3歳児以上の表現は、概ね模倣度が高く模倣の精度が高い。

描画過程における子ども間の模倣は、模倣度によって分析することでその精度を図ることができる。模写能力が高く描写力を有する子どもと考えられ、果たして「絵が苦手な子ども」なのか、という疑問をもつべきである。子どもの側の課題が誘因となる場合もあるが、「絵が苦手な子ども」や、常習的にコピーする子どもが現れるときには大抵の場合、子どもが模倣する状況がその子を取り巻く大人によって作り出されている可能性が高いということを理解するべきである。

B. 情報摂取と表現への反映に関する事項

B-1 子どもは、描画過程における子ども間の模倣において情報の選択を自分の意思や意図をもって行う。選択し摂取する情報は、視覚的にインパクトのあるもの、経験やイメージを共有できるものが挙げられる。

J. ピアジェによる模倣の発達によると第6段階で飛躍的に模倣のレベルが発達する7歳～8歳で、目的をもった模倣をするといわれているが、この年齢に達しない子どもにおいても同様だといえる。本研究の柱となる研究では4歳児、5歳児を対象としたが、情報摂取へのアプローチ、情報の選択において目的をもち、摂取した情報を表現に反映した。3歳以下の子どもにおいても、描画過程で模倣をするとき、主体は子どもである。人に強制されて模倣することはなく、モンテソーリが子どもの模倣について述べたように、目的に差はあるが模倣において子どもは意思や意図をもってあたる。子どもが摂取する視覚的情報は、大きくて明快なフォルムやインパクトのあるパーツあるいは美しいものをセレクトしている。セレクトする傾向としては、色彩よりフォルムを優先する、視覚的に明確で発達的に理解しやすい描画、経験的に知っているテーマやパーツ、自分の意図または描画のねらいにあった構図あるいはフォルムやパーツである。

B-2 描画過程における子ども間の模倣は情報摂取と情報の反映の仕方の違いによる特徴ある3つの基本的な型である Type1、Type2、Type3 に分類することができる。

主に3～5歳児の課題画の描画過程における模倣の基本的な類型を Type1～Type3 として、それぞれの特徴を提示した。Type1 は描画開始期からオリジナルの子どもの描画を情報ソースとして自己の表現に反映して進めていく。Type2 は自分の表現を進めていくプロセスで興味ある表現ツールの情報収集をして、自分の表現に組み込むタイプである。Type3 は2人または3人以上の複数で行うことができ、相互模倣を目的として情報交換しつつ描き進めていく。模倣度は高い順に Type3 > Type1 > Type2 である。これらの類型は複合的に出現することもある。また、0～2歳児のなぐりがきにおける模倣や3歳以上児の自由画帳に出現する模倣の Type は、上記基本型とは別の様相を示す。

B-3 描画過程における子ども間の模倣は子どもにとって積極的な問題解決法であり、表現の展開や、新たな表現の情報を得るための刺激となる。

子どもはなぜ描画過程で子ども間の模倣をするのか、描画過程における模倣は子どもにとってどのような意味があるのか、という疑問に対して「描画過程における模倣は子どもにとっては積極的な問題解決法であり、表現を展開したり、新たな表現を得るための刺激となる」からであると答えを導いた。模倣の基本的な類型と模倣度の項目を検証することにより模倣の誘因を見出すことができる。ただし、描画過程における模倣が出現しないで、豊かな表現が溢れる描画の保育・教育が現実に行われていることを鑑み、子どもの自主的な問題解決に頼ることがない描画の指導法を見直す必要があるであろう。

C. 子どもの描画表現と美的経験に関連する事項

C-1 子どもの描画過程における子ども間の模倣は、創造へとつながる。模倣した子どもの表現に摂取した情報の何らかの「変形」が認められる場合、子どもが美的経験をしたと考えられる。「変形」は創造につながる美的な作用であると考えられる。

描画過程における模倣を通して、子どもはいったい何を体験したのだろうか。K. モレンハウアーのミメシスの実験¹³では、子どもは模範の模倣を通じて芸術作品という模範に自らを関係付け、それに従って自らを美的に活動させているのであるが、描画過程における子ども間の模倣においても、子どもはオリジナルに自らを関係付け、それに従って自らを美的に活動させる。何らかの変形とは、構図、パーツ、色彩や描画材、コンセプト等を言い、「変形」はそれらが表現に現われた結果である。模倣のプロセスで表現者である子どもの内界と外界を媒介する美的な作用＝美的経験をもたらしたのであった。この展開こそ創造へとつながる模倣に内包された力である。

D. 保育・教育の内容の構造や指導法に関する事項

D-1 課題画と自由画では子ども間の模倣の効果に相違がある。特に自由画帳における模倣の効果は、より日常の生活や遊びに近い。

一斉に描く課題画と自由画題は Type1 ～ Type3 の模倣の類型で分類できるが、自由画帳における子ども間の模倣では、きっかけ型、コミュニケーション型、トレーニング型という別の分類が必要であった。自由画帳は子どもの日常の遊びにおける描画の自主トレーニングと描画を通じてのコミュニケーションの場であり、課題画とは意義の異なる有効な描画体験の場であることを認めることが必要である。¹⁴

D-2 描画過程における子ども間の模倣の出現には保育者・教育者の指導法が関連する。

課題画のように保育・教育の場で集団で描画活動をする場合、子どもたちは相互にその表現の影響を受け合うものである。M. フレザール (1985) の難しい遠近の表現に取り組む実験からは、子ども同士の描画の相互作用により集団での取り組みのほうが上達することが証明された。子どもの描画過程における模倣は、集団での保育・教育の場では自然発生的なものであり、プラスに働けば相互作用による教育効果があるが、保育者・教育者の関わりによって人的要因がもたらすコピーが出現する。例えば課題画における動機付けの失敗、テーマ選択のずれ、子どものイメージ共有の不全、受容性が低く、管理性、指導性の高い保育者・教育者の存在などである。子どもの力が理想的な形で発揮される描画活動のプロセスでは、保育・教育者の人的要因がもたらすコピーは発生しにくい。

IV 描画指導との関連**1. 新しい表現の創造へ向けて**

子ども、特に幼児から学童期初期の子どもが描画過程で同じ時空にいる他の子どもの絵を模倣するという事は珍しいことではない。保育・教育の場での子ども間の模倣は、課題画

であるか自由画であるかなどの条件によって子どもが模倣する理由は異なるが、日常的なレベルで子ども間の模倣が出現していることは本研究の結果からも明らかである。子どもが周囲の子どもの絵をよく模倣する理由のひとつは、描画の発達段階が近い子どもの表現が模範にしやすいからである。発達段階が近い子どもの絵は大人の絵より情報量が少ないことから絵文字的なデータとして子どもには読み取りやすく、摂取したデータを蓄積・変形・変換などする道筋を経て、自分の表現に反映することができるからである。描画過程における子ども間の模倣は決して消極的な子どもの行為ではなく、子どもの新たな表現の創造へつなぐ効果のある手法のひとつである。

では、模倣の効果とは何か。描画過程における子ども間の模倣は二つの方向において子ども自身に効力をもつことを本研究を通じて確認した。ひとつは創造である。もうひとつは子ども同士の社会における相互理解のためのコミュニケーションツールとなるものである。模倣が創造への入り口として意味をもつのは、摂取した情報をデータとして蓄積したり既に蓄積したデータと合成したり変形したりして、新たな要素として描画に反映するからである。本研究で独自に設定した尺度である模倣度で検証した結果、描画過程における子ども間の模倣の事例は模倣度の数値及び模倣度で設定した9項目の個別の得点から見て、模倣度が高く模倣の精度は高いが、模倣度100という事例は3～5歳児の描画ではない。あるのは別のスケールを持つ模倣度で検討した0～2歳児のスクリブルのいくつかの事例のみであった。そこで、子ども間の模倣が表現の創造へ繋がることを検証するために、モレンハウアーのミメーシスの実験に本研究の事例を照応して、摂取した情報を反映した表現に見られる「変形」に美的経験の痕跡を見出すことを試みた結果、描画過程における子ども間の模倣にも「変形」を確認した。このような道筋を経過して自分の表現に摂取した情報が反映された表現は、摂取した情報が子どもの内面で反省的な関わりをもって処理された結果であり、模倣の過程で子どもは美的経験をしたと言えるのである。摂取した情報を変形するプロセスで通過した美的な経験は、変形することで別の形態や新しいコンテキストへ連結し、異なるイメージへの展開がなされるなど、新たな表現の生成に作用する。美的な経験は子どもの表現を新たな創造へ導いてくれる。新たな表現や新しいコンテキストへの連結には生成された表現に「変形」や「変化」が鍵になることは拙稿「子どもの描画過程における模倣と美的経験」¹⁵で詳述した通りである。

コミュニケーションツールとしての効力は、自由画帳への描画における表現のトレーニングや子ども間のコミュニケーションの様相からわかるように、子ども同士の社会における相互理解のツールとなること、描画のパターンを相互に学び、スキルアップを自主的にすることにある。描画環境によってはType3のような相互模倣は子ども同士のイメージの共有を促進する。L.S. ヴィゴツキーが創造的な行為ではないとした繰り返しや、K. モレンハウアーが言う100%のコピーであっても共感的理解を深めるコミュニケーションツールとしてここでは重要な働きをする。模倣度が高い自由画帳における描画やそのときに行われる子ども間の相互模倣は、子どもが生み出した描画の自主トレーニングである。独創的な表現が生まれる可能性は低い、子ども同士が育ち合う創造の場だと言える。

模倣への肯定的見解をもつウィルソン／ウィルソン等は文化的遺産としての芸術作品を模倣するプログラムを通じて自己の表現を創ることを「再創造」という言葉で表現している。また、E.W. アイズナーは個人の視覚的形態を生み出すためのデータとして、美術や自然に存在する形態を個人が経験することの重要性を示している。描画過程における子ども間の模倣も、情報源は同じ年代の同じ空間に存在する他の子どもの描画であるが、手近な環境にある自分にはない、もしくは自分が摂取したいと思った形態を子どもが経験することであり、そこから新たな視覚的形態を生み出している、あるいは摂取したデータにより自己の表現を創る「再創造」をしていると考えられる。描画過程における子ども間の模倣は子どもがその時々の表現上の問題を自主的に解決したり、合目的なデータあるいは新たなデータを摂取したりして表現へと結ぶ、創造への扉の一つであると言えるのではないだろうか。

2. 鑑賞的情報交換の時空を設定する試み

1) 描画活動の実践

平成 20 年 3 月 28 日告示、平成 21 年 4 月 1 日施行の新幼稚園教育要領第 2 章「ねらい及び内容」領域「表現」における「内容の取扱い」の (3) に次の記述がある。

生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるように配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

自分以外の他児の表現に触れ、他児が楽しんでいる様子を見て自らも表現を楽しんだり、多様な表現があることに気付くことで自分の表現に自信をもったり、表現に刺激を受けたりする環境をつくることを奨励している。上記の事例は、情報交換の場を設けることで相互模倣のエリアを広げ、情報の選択を促し自己の表現を展開するきっかけをつくることになる。幼稚園教育要領の内容の取扱いにも対応する方法ではないだろうか。また、小学校学習指導要領図画工作編では、図画工作の内容に「表現」と「鑑賞」を置き、それらが相互関連した授業構成を期している。

そこで描画過程における子ども間の情報交換を積極的にできる環境をつくることを提案したい。保育園や幼稚園では、望ましい表現をしている子どもの描画を提示して、他の子どもを啓発するタイプの指導法をとることはほとんどない。一人ひとりその子なりの表現を求めからであり、個別の対応が常態でもあるからだ。しかし、実際には他児の表現から多様な情報を摂取している現実があることから、他児の絵を見るなどということは無意味に近いのではないだろうか。コピーをせよということではないが、集団の場で多様な情報に触れることは自己の表現を豊かにするために必要であるといえよう。そのための方法の一つとして描画のプロセスにおける鑑賞的情報交換の時空の設定を挙げたい。

美術鑑賞は芸術作品など美的な対象を視覚を通じて自己の中に受け入れ、その表現しようとするところを掴み取りそのよさを味わうこととされるが、その点では距離が近いようであ

る。鑑賞的情報交換という表現をしたが、鑑賞と模倣は同質のものなのだろうか。描画過程における模倣と美術鑑賞は対象から視覚情報を摂取し個人の視覚的形態を創造するためのデータを蓄積するという点においては同様のスタンスで捉えることも可能である。情報摂取という観点からは前述の通りであるが、鑑賞は必ずしも情報の反映を伴わず、模倣は摂取した情報の反映を必ず伴うものである。鑑賞的情報交換の時空においては、情報の反映については子どもに任されるのであるが、創造的な表現の展開に繋がることや、自己表現の展開への積極的な問題解決策を見出す場となることを期待するものとなる。

次に鑑賞的情報交換の実践事例を紹介する。

「プラネタリウム」の事例

子どもたちがプラネタリウムをイメージするように物的環境として蛍光絵の具を使用し、暗幕を張り、ブラックライトが点灯できるように保育室がセッティングされた。支持体は黒、藍色、群青の色画用紙の上に透明フィルムをカバーのように画用紙の一辺に貼り、開閉ができるようにしたものである。細かい表現が出ると予想して、筆と綿棒が準備された。この保育は2007年7月に京都市内私立K保育園5歳児34名を対象に描画活動が行われたものである。保育の背景としては、7月初旬に保育園から行ったプラネタリウムで星座を見た感動的経験と、その前から興味を持って保育の中で話し合ったり、宇宙についての図鑑や絵本を見たりしていた子どもたちは、経験後にはさらに関心が増したようであった。プラネタリウムで見た星座を中心に、自分で想像した星座を創作することがねらいであり、点を使って星を描き(色画用紙)、それらを線でつないで星座を創る(透明フィルムのカバー)。描画活動の環境構成のポイントは、場の雰囲気作りと描画活動のプロセスに鑑賞的情報交換の時を設けることである。

活動の流れは以下の通りである。

[場の環境からプラネタリウムに行ったことを思い起こす→見つけたこと、知ったことを話し合う→描画に関する用具を確認する→星を描き始める→ブラックライトに切り替えプラネタリウムを再現し、数人ずつ星を光らせて全員に見せ合う→星座を見つけた子どもから星をつないでいく→完成したらプラネタリウムに飾る]

結果として、導入部分から星座の話が出ていたにもかかわらず、まず星で画用紙を一杯にすることをすんなり受け入れた子どもと、点をつないで早くも星座を作りながら描こうとした子どもに初期部分で分かれた。ここで迷って情報収集をする子どもが出る。保育者はどちらも受け入れる態勢をとった。

画用紙に星が満たされてきた頃、鑑賞的情報交換の時をもつ。保育者は子どもの紹介をすただけで、一切のコメントは控えた。ブラックライトに浮かぶ星を見て「きれい」の声が上がる。点をつないで星座を創った子どもたちからも、点のみで画面を満たした子どもの描画への評価が高い。保育者たちが、表現として動きがあって面白いと評価が高い描画への反応はあまりなく、満天の星空に子どもたちの人気が集結した。

その後保育室は元の環境に戻り、子どもたちは星座を創る。多様な表現を目にした子ども



図1 描きだす

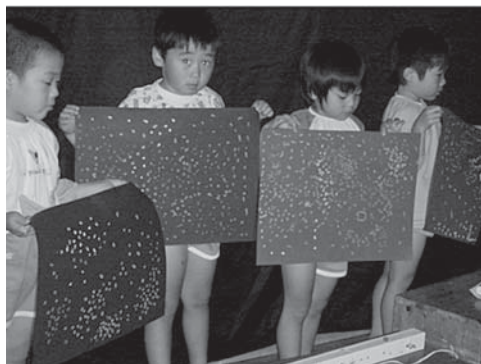


図2 相互に見る

たちの一つの不安は消え、星を結ぶ行為へと向かった。定石では星座のイメージが結べないと次の不安が出てくるが、最初の不安が解消したことで個別の対応のみで星座は生まれていった。

この保育者は描画指導に順序性を持たせた保育案を立てる傾向にある。順序を踏むことで順序どおりにいかなかった子どもが戸惑い、模倣という形で問題解決に向かうことが頻発した。この保育で画期的な役割を果たしたのは、描画が次の段階へ入る前に保育者が子どもの表現を確認するのではなく、鑑賞的情報交換の場を設けて子どもたち相互に表現を確認させたことであろう。相互的情報摂取の一つの方法として評価できるものである。場の雰囲気作りではいつもこのような環境をつくることはないであろうが、描画材、支持体ともに子どもたちが意欲を持って取り組める工夫があった。また、子どもがイメージを共有できる保育の流れが背後にあって、この活動がプログラムされたことも重要な要因である。表現過程における子ども相互の情報交換を促す必要感が近年重要になってきたと思われる。集団における保育・教育の意義の一つがここにあることを改めて示唆するとともに、描画過程における子ども間の模倣研究の成果が生かせるのではないだろうか。



図3 ブラックライトで光らせる

2) 鑑賞と表現における課題

模倣の効果を生かした相互鑑賞の時空は、表現の発展的継続や再創造に有効な手立てとなった。ここで残る課題は、発達的に捉えやすいものを捉えるという子ども間の模倣と同次元での情報の摂取という問題である。今捉えられる情報を十分に捉えることで、現在の表現を充足できる半面、さらに高度な造形的で美的な気付きへ誘うことが、この時空だけでは不十分

であることが分かる。プラネタリウムの保育を例にとれば、表現のねらいである動きのある星座の表現や画面いっぱいに散りばめられた星座よりも、銀河のような表現に子どもの眼が惹かれたことが挙げられる。保育・教育のねらいによって何を重視するかは変わるが、子どもの価値観と保育者の願いのずれをイメージして指導・援助にあたらなくてはならないことは言うまでもない。

V おわりに

本研究は子どもの描画過程における模倣を、子ども間の模倣に特定してその意味を実証的に検証したもので、子どもの造形教育における模倣研究の領域では、極めて現象的で小さな間口からの研究である。しかし、現象こそが謎を解く鍵の宝庫であり、実証的な研究は過去の理論を越えて、常に子どもとの接点にあって理論構築の先端にあると考える。描画過程における子ども間の模倣で真似としてネガティブに扱われてきた模倣は、あるケースでは消極的な問題解決策であり、またあるケースでは積極的な表現展開を目的としたものであったりするが、描画過程における子ども間の模倣を決して否定的に捉えるものではなく、子どもの創造活動の一端として表現の道筋に組み込まれたものとして肯定的なスタンスを今以上に与えたいものである。

子どもの描画過程における模倣の研究を通じて、子ども間の模倣は創造へ繋がる扉を開くことであるということ、創造への道へ繋がることを確認することで子ども間の模倣へのネガティブな見方を変えることができたであろう。これは子ども間の模倣の研究の中心的な意義である。描画過程における子ども間の模倣という小さな間口から収集した事例を積み、描画過程における模倣に内包された意味を理解することによって、保育者・教育者が子どもの描画過程における子ども間の模倣に対する意識を変え、描画過程における子ども間の模倣と、模倣する子どもをまず肯定的に受け止めることが必要である。さらに描画過程における子ども間の模倣がどのような経過で出現したかを分析することが求められる。子ども間の模倣がしばしば、保育者・教育者の保育・教育上の問題が引き起こす場合があることを認識することも再確認できたのではないだろうか。

「描画指導の指標として—子ども間の模倣の実態—」は保育者・教育者が描画過程における子ども間の模倣の意味を理解する手立てとなるものであり、保育・教育現場で出現する模倣の個々の意味を理解し、子どもへの個別の対応を選択するための参考になるだろう。特に乳幼児期の経験は三つ子の魂百までといわれるようにその後の人生に大きく影響を及ぼす。子ども時代に描画に対して苦手意識を植え付けることのない環境で子どもを表現に向かわせることに役立つと考える。保育者・教育者自身が自分の指導力の過不足を認識し、子どもたちが新たな創造に向かうための描画環境の構成の仕方や子どもたちへの情報提供のあり方についての工夫につながるものである。

長い歴史の中で語られてきた模倣の問題に絶対という答えは見つからない。近年、保育・教育の場で描かない子どもや答えが見えないと描き始めない子ども、確認すべき模範を要求する子どもが増加してきた。他児の表現を模倣することに気付かない子どもも出現している。

情報を子ども間に求めない子どもの出現は、描画における困難な場面を乗り越える方策の案出、新たな描画スキルの獲得と醸成、創造への意思の表示をしない子どもが出現したのではないかと推測する。主体的な問題解決に取り組まない子どもの出現とも言える。子どもが自分の視覚的形態を生み出すためのデータを蓄積するために、美術や自然に存在する形態をその子が経験できる環境構成の必要感が高まってきたのではないだろうか。

前出の事例は、情報交換の場を設けることで相互模倣のエリアを広げ、情報の選択を促し自己の表現を展開するきっかけをつくることになる。自分以外の他児の表現に触れ、他児が楽しんでいる様子を見て自らも表現を楽しんだり、多様な表現があることに気付くことで自分の表現に自信を持ったり、表現に刺激を受けたりする環境をつくることを奨励している、幼稚園教育要領の内容の取扱いにも対応する方法ではないだろうか。

保育者・教育者が「描画指導の指標として一子ども間の模倣の実態―」から得た描画過程における子ども間の模倣の基礎情報をもとに、子どもが創造的な表現を生み出すために、以下のことが望まれる。まず描画が苦手だと思われる子どもへのまなざしを変えること。保育者・教育者が描画に至るまでの保育のプロセスにおけるイメージの共有をはかり、子どもが自分の視覚的形態を生み出すための経験を重ね視覚的形態のデータを蓄積する内容の設定を勧案すること。保育・教育者の人的要因がもたらすコピーを生み出さない工夫をし、子どもの描画過程における子ども間の模倣の効果を生かす方法として、保育・教育の場で時空を共有する子どもたちが情報の相互交換の場を持つことで刺激を相互に受け、創造的な表現へ向かう刺激を得る方法を子どもの実態に沿って実践する保育・教育を創造すること。

今後筆者にとっても、子どもがイメージの共有を出来る継続した活動や子どもが情報の相互交換ができる場を組み込んだ活動の試行を重ね成果を出すことが課題である。

〈文献〉

- 1) 奥美佐子著「幼児の描画における模倣の研究－描画過程からの検討－」『大学美術教育学会誌』36号 大学美術教育学会 2004年 pp.113-120
- 2) W. ヴェンヤミン著 山口裕之訳「類似性の理論」『ヴェンヤミン・アンソロジー』河出書房新社 2011 p.188
- 3) W. ヴィオラ著 久保貞次郎・深田尚彦訳『チゼックの美術教育』黎明書房 1999年 p.112
- 4) V. ローウェンフェルド著 竹内清、堀ノ内敏、武井勝雄訳『美術による人間形成』黎明書房 1995年 pp.97,151,152
- 5) G. H. リュケ著 須賀哲夫監訳『子どもの絵』金子書房 1979年 p.90
- 6) E.・W. アイスナー著 仲瀬律久也訳『美術教育と子どもの知的発達』黎明書房 1986年 p.122
- 7) B・ウィルソン、A・ハーウィッツ、M・ウィルソン著 花篤實、岡崎昭夫、阿部寿文訳『美

術からの描画指導－アメリカ DBEA の新しい指導法－』日本文教出版 1998 年 pp.26-28

- 8) 奥美佐子著の以下の論文参照。
「保育者・小学校教諭の子どもの描画過程における模倣に対する意識調査－模倣の位置付けと対処法について－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第 29 号 名古屋柳城短期大学 2007 年 pp.49-59、
「学童期の描画における模倣の意味－描画の発達段階から探る－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第 28 号 名古屋柳城短期大学 2006 年 pp.79-94、
「幼児の描画における模倣の効果」『保育学研究 第 42 巻第 2 号』日本保育学会 2005 年 p. 64
「0～3 歳児の描画過程で子ども間の模倣は出現するのか－1 年間の記録から検討する－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第 30 号 名古屋柳城短期大学 2008 年 pp.101-114
- 9) M.A.Samier, Contribution a l'etude de la perception chez les jeunes enfants au moyen du dessin de l'elephant, Revue de Neuropsychiatrie de l'Enfance et de l'Adolescence' 1965 13, 1-2.
- 10) Ph. ワロン／A. カンビエ／D. エンゲラール著 加藤義信／日下正一訳『子どもの絵の心理学』名古屋大学出版会 1995 年 pp159-166 Ph.Wallon, Le dessin spontane d'animaux chez l'enfant, Bruxelles, Editest,1987.
- 11) M.D.Fresard, Etude genetique de certains aspects du graphisme enfantin, Enrance, 1981,4-5,299-309.
- 12) 奥美佐子著「幼児の描画における模倣の研究－描画過程からの検討－」前掲書によって、模倣の類型を作成したもとなる 10 事例を指す。
- 13) K. モレンハウアー著 真壁宏幹、今井康雄、野平慎二訳『子どもは美をどう経験するか』玉川大学出版部 2001 年 p.134
- 14) 奥美佐子著「自由画における子ども間の模倣 2」『研究紀要』第 52 号 神戸松蔭女子学院大学 2010 年 pp115-128
- 15) 奥美佐子著「幼児の描画における模倣と美的経験」『名古屋柳城短期大学研究紀要』名古屋柳城短期大学 第 27 号 2005 年 pp.43-52

(受付日：2012. 1. 10)